

津軽海峡域における資源利用史の学際的研究

上 條 信 彦¹

II.1

津軽海峡域における資源利用史の学際的研究

はじめに

中緯度地帯にある北日本は歴史上の環境激変によって、他の地域に比べ、大きな影響を受けてきた。しかし、過去の人々はこれらの環境激変に対して、新しい食料の導入や資源の開発・物流拠点の形成という生業的・文化的適応を行うことで、その変化を乗り切ってきた。北日本地域には世界的に環境激変期の生態系を知るうえで貴重な考古学的フィールドがある。

これについて、本州では縄文時代という枠組みで説明されるが、縄文文化が維持されつつも弥生化が進んだ本地域では単純に従来の説明を当てはめることができない。そこで、本研究では①独自文化を支えた縄文時代の食料資源の実態解明と、②気候変動とその適応化現象の一つとして現れた弥生化という社会変化に対し、資源利用がどう変化したのかを解明する。

1 背景と目的

①津軽海峡域の独自文化を支えた縄文時代の食料資源の実態解明

本研究では縄文時代前半期の食料資源の一つとして漁労活動に注目した。その理由は津軽海峡域の交流は主に海洋漁労民が担い手と考えられるからである。渡島半島では多くの貝塚の調査事例があるが、青森県側では詳細な調査は限られる。要因は調査自体が昭和 20（1945）年代から昭和 50（1975）年代にかけて実施されたものが多く、また調査目的が土器編年などの時間軸に主眼が置かれており、漁労技術やその対象物に関してまだ注意が払われていなかったことにある。

特に円筒土器文化期は、海進から海退までの過渡期にあり、そうした環境変化への適応を探るうえで貴重である。そこで本研究では七戸町ニツ森貝塚に注目した。ニツ森貝塚は、令和 3 年 7 月世界文化遺産に登録された「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産の一つとなった。太平洋岸の小川原湖西岸の段丘上に立地する前期～中期の貝塚である。貝塚の下層には海水性、上層には汽水性の貝殻が堆積し、海進・海退に適応した人々の姿が分かる。しかし、発掘は史跡保存目的の自治体調査を除き、貝塚の主体を調査した 1962・1975 年の発掘調査については正式な分析結果が出ていない。七戸町でも本貝塚を活用するにあたり、遺跡の詳細や性格を知りたいというニーズがあった。そこで、本年度は骨角器と剥片石器の資料化と土器のリスト作成を実施することとした。

②気候変動とその適応化現象の一つとして現れた弥生化における資源利用の変化

本州最北端の弥生時代前半の水田遺跡として知られる砂沢遺跡や垂柳遺跡は、水稻農耕文化が弥生時代の早い段階で定着したことを示すだけでなく、南方で栽培化が始まったイネが北緯 40 度を越えた地域で紀元前 300 年頃に展開していたことを示しており、こうした例は世界史上、稀である。しかしながら、弥生時代後半期には忽然と水田遺跡が消滅し、古代になると再び爆発的に遺跡数が増大する。イネが列島を

¹ 弘前大学人文社会科学部

北上する要因を知るためには環境激変による作用と、ヒトによる技術的介入を解明することが重要である。

これまで水稻農耕文化が列島を北上する要因を知るために、ここ5年ほどで弘前市砂沢遺跡、同・清水森西遺跡、田舎館村垂柳遺跡の調査、研究を実施し、また、昨年度は高所の水田が難しい立地で見つかる弥生遺跡である湯の沢遺跡を発掘し、本州北部での縄文時代から弥生時代への変化、つまり縄文時代の終焉が単純ではなく、高所と低所の集落間で異なるという重層的な複雑さがあることが分かってきた。

清水森西遺跡は、2016～18年度の調査により、弥生時代で日本最北の炭化イネが発見されたほか、東北で最北最古の水田跡が見つかった弥生時代前期の砂沢遺跡と、大規模な水田跡が見つかった弥生時代中期中葉の間の時期に位置づけられる中期初頭という時期（五所式）の資料を発見し、不明だった上記の水稻農耕の時間的空白を埋める資料を見出すなど多くの成果を出してきた。しかしながら、当時の調査は周辺がリング園地の中にあったため、調査範囲が限られ、集落全体の様相は不明だった。

そこで、本研究の2つ目の目的として、気候変動とその適応化現象の一つとして現れた弥生化という社会変化に対し、資源利用がどう変化したのかを解明するために、弥生時代中期初頭の集落を調査する。

2 実施内容

- ①縄文時代の資源利用史の実態解明：世界遺産の構成資産の一つである七戸町二ツ森貝塚出土土器、石器、骨角器を整理した。
- ②弥生時代の資源利用史の実態解明：北限の弥生イネを検出した弘前市清水森西遺跡の発掘調査と、その資料整理を行った。

3 七戸町二ツ森貝塚出土土器、石器、骨角器の分析結果

七戸町教育委員会との共同研究契約を結んだ。また、これまで行方不明であった発掘当時の図面や台帳、写真類を弘前市、七戸町、村越潔撮影写真類から発見した。これによって出土資料の学術的価値を大きく高めることにつながった。これら資料類のデジタル化を進め、遺構図はトレースを進めた。出土土器は完形個体、口縁部片を中心に1520点を撮影、出土地点などの情報をデータ化した。これらによって、



二ツ森貝塚出土資料整理風景

各地点の層序ごとの時期をおおよそ把握することに成功した。

その他石器と骨角器の図化とデータ化を進めた。骨角器は217点を図化、形態分析し、器種に注目すると釣針形骨角器・ヤス先状骨角器といった漁撈具と推定される遺物が前期後葉～中期前葉に増加することが分かった。中期後葉には資料数が減少し、銚頭状骨角器のなかに一王寺型E類がみられる。そのほか、魚骨製尖頭状骨角器が中期後葉には認められない。

これら各器種組成に注目すると針状骨角器には変化がないことから、漁撈具と推定される遺物のみ変化があったことが分かった。おそらく中期後葉に小川原湖が汽水化したため、少なくとも釣漁が低調になり、外海への進出といった銚猟への転換がうかがえた。

石器は528点分析した。その内訳は、石核27点、剥片80点、碎片7点、石鏃30点、石槍16点、石匙12点、石筥7点、磨製石斧14点、打製石斧1点、スクレイパー173点、RF91点、磨石・敲石類8点、石皿・台石類1点、半円状扁平打製石器9点、自然礫49点、石製品3点（異形石槍1点、石棒1点、線刻礫1点）である。

各地点別の石器組成について、前期後葉主体である1975年A地点ではスクレイパーやRFといった刃器類が主体で剥片・碎片が続く。前期後葉～中期前葉に属する1962年Ⅱ号貝塚では石鏃および刃器類が約30%を占め、主体となる。他地点に比して石匙の比率が高い。植物加工に用いられる石皿・磨石類が少ないことから、貝塚が形成され始める縄文時代前期後葉には、狩猟活動が活発だったことが示唆される。

中期の1962年Ⅰ号貝塚では石鏃と石槍、石筥があり、この段階においても石皿・磨石類は多くない。よって、前時期に続いて狩猟活動が展開していたと推定される。

以上より、前期から中期にかけて石鏃主体としつつも、石槍も伴っており、これらを組み合わせた狩猟法が採用されていたと考えられる。加えて、石筥も出土しており、動物の狩猟後は皮革加工などもおこなわれていた可能性がある。一方で、礫石器など植物加工工具の出土量が少ない点は注目される。

4 弘前市清水森西遺跡の発掘調査の結果

弘前市教育委員会の協力のもと約400㎡を調査した。発掘調査の結果、竪穴建物跡5軒、土坑2基、遺物集中区1ヶ所、石器剥片集中1基、ピット6基を検出した。全て弥生時代中期初頭（約2,200年前）である。それぞれの建物跡は大型の円形で径約8mを超える。これら建物跡の深さは1～5cmと浅く、壁面の立ち上がりは不明瞭であった。第1・2・4号建物跡の内部には石囲炉と柱穴、貯蔵穴を伴う。各住居の柱穴は6本ほど、深さ1m以上と深い。調査区西端にある第5号建物跡のみ深く、他の建物跡と様子が違う。この建物跡からは多数の遺物が見つかった。

遺物集中区は、広さは2×4mで塚状になっていたとみられる。土坑2基のうち1基は長さ2m程の楕円形で、底面からは壺が見つかった。このことから土坑と推定される。石器剥片集中からは石器の素材となる長さ3cmほどの剥片約100点が見つかった。おそらく剥片石器素材としてカゴなどに入れられて保管されていたものが埋没したとみられ、石器製作技術の解明が期待される。

遺物はコンテナ箱30箱分検出した。ほとんどが弥生時代中期初頭の五所式土器で、なかには西日本の弥生土器の影響を受けた類遠賀川系土器が含まれる。高坏脚部内面に漆容器に再利用した資料もある。石器には石鏃、石錐、磨石・敲石類、台石、磨き石がある。土製品は土偶4点、土玉1点がある。石器のなかには出来島産黒耀石とみられる石材で作られたものもある。



清水森西遺跡発掘調査全体空中写真

おわりに

このように調査の結果、縄文時代中期の食料資源利用の一端が明らかとなった。また、弥生時代の発掘調査では、建物跡を伴う数少ない五所式主体の集落跡が津軽平野で初めて見つかった。このことは生業だけでなく、社会のあり方を含めた総合的な東北弥生文化の解明につながる。一つの型式に収まる短期間のまとまった資料が得られたことから、本格的な水稻農耕が始まる中期中葉までの詳細な変化を知ることにもつながる。今後も両遺跡の分析を進める予定であり、最終的に学会発表や遺物などの展示、報告書の刊行を行う予定である。

最後に、二ツ森遺跡については櫻庭陸央、算用子眞充、石戸谷龍生が資料化を行い、清水森西遺跡は日本考古学ゼミナール、実習生の諸氏が発掘に参加した。また七戸町・弘前市の各教育委員会、地権者の方には土地や資料の借用でお世話になった。末筆ながら記して感謝申し上げます。